

# すぽっとライト

NO. 47

四国運輸局では、消費者ニーズや消費者行政上の課題を把握し、その結果を行政に役立てていくことを目的として公共交通機関の利用者等を対象にインタビューを行っています。

今回は、行政と住民が協働して、多くのあらゆる観光客にストレスなく楽しんでいただく観光地を目指している取組について、内子町ビジターセンター所長の中岡紀子さんにお話を伺いました。

## まず、内子町の観光資源についてお聞かせ下さい

内子町は1982年に、約3.5ha、600mに向かい合う建物、約120棟のエリアが国の重要伝統的建造物群保存地区の選定をいただきました。その選定が、内子町の文化観光振興のスタートになりまして、町並みの凍結保存ではなく生かして使う、現代的再生を果たして、今の暮らしや今の人びとに感動を与えられるような施設づくり、ひいては文化観光を展開していきましょう、ということで、町長事務部局に保存修理なおかつ活用というミッションを与えた町並保存対策室という部署が作られました。

町並保存対策室では、「木蠟資料館 上芳我邸」を中核にし、国の重要有形民俗文化財指定を受ける業務を行い、指定後は、上芳我邸内の木蠟資料展示棟での企画・展示などを行いました。ちなみに木蠟とは櫛の木の実からできる天然の油脂で、蠟燭の原材料になるのですが、鬢付け油ですとか化粧品、ポマードなどにもなります。



木蠟資料館 上芳我邸

## 内子町では八日市・護国地区の町並み、特に内子座が有名と伺っていますが、その魅力について詳しく教えてください



観光客でにぎわう内子座

八日市・護国の町並みは、商店街に隣接して約600mあります。そこには、先ほどお話ししました木蠟資料館があり、少し離れた所に内子座があり、多くの落語家や歌舞伎役者が舞台を披露するために訪れます。

内子座は、大正時代に建てられた劇場で、文楽などの興行により栄えていましたが、映


画館となるなど、変遷を経て、老朽化により取り壊す計画がありました。町並み保存運動に伴い所有者から町に譲り受け、昭和58年から3年をかけて、創建当時の姿に改修し、平成27年に国の重要文化財指定を受けました。

内子座は、カラオケや日本舞踊、コーラスなど、地元の合同芸能発表会を披露する場でもありますし、ピアノを習っている方たちの発表会であったり、あるいは、一流の落語家や歌舞伎役者、国立劇場の技芸員を招いて質の高い文楽を披露したりします。

最初は慣れなかった地元の出演者も、そのうち落語で使う演目を書いた「めぐり」を自分たちで準備したり、アナウンスをしたり、プロのような舞台演出が出来るようになりました。劇場がひとつあるだけでスタッフが育ち、演じる人たちもその気になって、有名歌舞伎役者が演じた舞台に恥じないようにと、頑張っています。また、ビジターセンター裏に、愛媛県立内子高等学校があるのですが、郷土芸能部がありまして、和太鼓を叩きます。作曲も練習も太鼓の種類も自分たちで全部情報収集して作り上げています。郷土芸能部の成果発表会を年1回内子座で行っているのですが、親兄弟達が観客として集まり、2階観客席からは紙吹雪がまかれるなど、大いに盛り上がります。



内子高校郷土芸能部の上演

 観光客も楽しみにしている内子座ですが、このほかに徒歩圏内でおすすめの場所がありますか



商いと暮らし博物館

この通り自体が商業の街なので、大正10年頃の商いの様子を人形と物で当時の状況を展示した、「商いと暮らし博物館」が、おすすめのひとつです。人が近寄るとセンサーで感知し「おいでなはい」と、方言で声を掛けてきます。

方言と言いますと、ビジターセンターが、「A・runze-あ・るんぜ」という愛称で呼ばれています。また、まちの駅が、「Nanze (なんぜ)」と呼ばれていますが、

れっきとした日本語です。そもそも、内子座が復元されたあと、素人の青年たちが、「AUGHANCE (オーガンス)」という劇団を立ち上げました。オーガンスというのは異国情緒たっぷりに聞こえますけど、「おおがんすたれ」と言いまして、このあたりでは、大ボウ吹き、大風呂敷を広げる、出来もしないことをまことしやかに言って大嘘をつく人



アマチュア劇団「オーガンス」の上演

のことを指します。「おおがんすたれ」から、夢があってもいいじゃないか、虚構の演劇をやってやろうじゃないかということで名付けられました。また、方言が、かわいらしいアルファベットやカタカナだと、地元では当たり前前の音の響きが、視覚化することにより非常に異国情緒を醸し、地元の方言を見直すことが流行り、商工会青年部の若者達が、「N a n z e」と名付けました。「なんぜ」は「ありません」という言葉ではあるのですが、行きつけの商店にふらっと入ると、特に子ども達が入ると、商店のおかみさん達が「なんぜ？今日は何か用かい？」と声かけをするときのあいさつ兼おもてなしの言葉ということで、まちの駅「Nanze（なんぜ）」になりました。でも、「なんぜ」では「nothing（ない）」に伝わるので、「ないことはない、内子の魅力はたくさんあるのですよ」という対の意味を込めて、ビジターセンターは愛称が「あるんぜ」になりました。

#### 少し距離を伸ばせば、美しい風景も見られると伺っていますが

ここから約14kmほど離れたところの石畳地区の屋根付き橋や泉谷地区の棚田も見所です。石畳地区に来られた方は皆さん異口同音に牧歌的で丁寧な地域づくりをされているということで、評価が高いです。農家を移築した石畳の宿は、海外の方にも人気で、滞在の拠点である宿が増えていくといいと思います。


外国から来られた方はインターネットサイトやガイドブックの情報を頼りに内子町に来られますが、四国運輸局さんが、四国遍路に力を入れられていますので、海外から内子町を訪れる方が非常に増えております。中には、遍路参りの方の立ち寄り先もあり、平成28年には3,767人の外国人観光客が内子町に来られ、そのうち約300の方が宿泊されています。



石畳地区の屋根付き橋



泉谷地区の棚田

 ちょうど今、観光ガイドの方が団体を案内してきましたね。観光ガイドを希望される方はどれくらいですか？また、最近では外国から来られる方が多くなりましたが、多言語によるガイドはどうですか？

平成2年から町の有志の皆さんが「町並みガイドの会」を結成し、一生懸命勉強していただいて、ボランティアで年間約4,000人から6,000人の方をガイドしています。また、外国から来られる方に対応するための「外国語ガイドの会」という組織があり、登録した方でも差はありますが、ヒアリングできてすぐ答えられる方が3~4人ぐらいおられます。駆け出しの方は、内子座だけのガイドをやっていただき、ふつうはガイドさん1人で20~30人の方をご案内する目安ですが、多いときには40~60人の方を2グループに分けてご案内しています。



地元住民ボランティアによる外国語ガイドの様子

 中岡さんが所長をされています、内子町ビジターセンターについてお聞かせ下さい

平成21年度に四国運輸局さんが実施されました、「内子町における観光まちづくりコンサルティング事業」において、旧内子町図書館の観光事業での活用として、旧図書館を内子についての情報提供、地域への案内が出来るビジターセンターとしての活用が提案さ



れましたので、これを具体化しました。

ビジターセンターは、1階と2階の断絶を防ぐためにけんか凧や笹飾りなどの空中展示を行い、その展示に驚かれる方は質問をされます。「七夕過ぎているのに、どうして笹を飾っているの？」とか。なので、実は一月遅れで、雛送り（※）も3月3日ではなくて


4月3日なのですよと。とにかく、質問をされる方は脈があると思います。それでも、あまりべたべたしすぎると敬遠されるので、つかず離れず、基本、質問があった時だけ対応し、ヒントになるものだけをお示しして、後は自由に見てもらい、次々に質問が出始めると、2階も見てください。普通だったらトイレ休憩だけ5分で終わりですが、30~40分ゆっくりご覧になる方もおられます。様々な質問を受けますので、こちらもアンテナを立てて、お客様の興味に伴走して、知りたいことを上手にお届けするようにしていますが、判で押したような答えもありませんので、ビジターセンターの職員は、毎日が試行錯誤です。もちろんお叱りも受けますので、極力礼節をわきまえて内子町のファンになっていただくための入り口として、他にはないおもてなしや接客が出来るように、今までの経験値を踏まえながら、まっさらでお客様を受け入れています。



ビジターセンターの空中展示

私たちは、行政と接客業の兼務ですけれども、救われるのは、接客やおもてなしの力が身につくということ、それと、実際に観光客のニーズを肌で感じることができる、政策でやっても、それは本当に必要なのだろうかというローリングができる、小さい町だからこそできるということですね。

私たちは、行政と接客業の兼務ですけれども、救われるのは、接客やおもてなしの力が身につくということ、それと、実際に観光客のニーズを肌で感じることができる、政策でやっても、それは本当に必要なのだろうかというローリングができる、小さい町だからこそできるということですね。

 **バリアフリーの取組についてお伺いしますが、車いすを利用される方が来られたらどのような対応をされますか**

内子座の中にはさすがにお入りになれないので、外観だけの解説になりますが、パネルを使って説明したりしています。お手洗いは、清正ひろばや町並駐車場にある車いす対応トイレを使っていただくことができます。清正ひろばにある、古民家風の多目的トイレは、国土交通省の街並み環境整備事業で整備されました。建物そのものは文化庁の国庫補助事業で整備され、伝統的な町並みの景観に併せて新しく建築された民家です。



古民家風に整備された、清正ひろばの多目的トイレ



このほか、車いすの貸出を町並駐車場で行ってほしいというご要望もあり、町の社会福祉協議会から借りて常備し、散策が終わりましたら、お客様のご都合がよろしい場所へ取りに行っています。貸出のご要望が頻繁であれば、あらかじめ社会福祉協議会から借りておく場合もあります。また、地域のお店が店の前に車いすを置いて、車いすをお使い下さい、と表示しているところもあります。これも乗り捨てOKで、地域

住民がすごく協力的です。

車いす貸出のシステムもありますし、町民の方の厚意により無償で車いすを提供いただいています。健常者だけでなくお身体が不自由な方々にも旅を楽しんでいただこうという気持ちが、住民のみなさんにあるということが非常にありがたいです。

#### 最後になりますが、内子町は今後どのように進化していくのでしょうか

商業活動の二世が帰ってきていらっしゃるので、店主の方が観光客に向けて、新しいサービスとかメニューとか何か仕掛けをしてもらえたらいいなと思います。イベントを商業のかたちでの切り口を作って、お客様を取り込むようなアイデアを出してきてほしいなと思います。9月23日にドイツフェスタをするのですが、ドイツのローテンブルク市と姉妹都市になりまして、それを記念してドイツの文化を知ろうという催しです。ドイツのお食事とかビール、ワイン、それから、おもちゃや民族衣装に触れていただくなど、ドイツに特化したイベントであり、そこでも内子町の料飲組合のみなさんがドイツメニューに挑戦されたので、どうして内子でドイツメニューなんだろうということ、それがおもしろかったと思います。



観月会などは、行灯が揺れて通りが幻想的に  
なり非常に喜ばれるので、ここで着物を着て歩  
きたいというご希望が以前からありました。そ  
の着物を着るプロジェクトは地域おこし協力隊  
が作ってくれています。

先日、フランスのジャーナリストのみなさん  
をお招きしたときは、190cmくらいの男性  
が着物を着てみたら、着物の丈が短くて足が出



ていて、身長も  
お聞きして  
合うサイズ

を探してみたのですが見つからなくてお気の毒でした。  
海外の方でもアジア圏の方は着物が好きで、先日も台  
湾の方が着物体験だけのために来られ、楽しみにしてい  
たと仰っていて、とても似合っていました。

内子町の伝統的な町並みの景観と内子座でのアートの  
活動と里山とか田園とか、そういうものを組み合わせ  
て、あまり奇をてらわないけれど、日本の文化要素があ  
ります、みたいな「内子絵巻」を打ち出して支持を得た  
らありがたいと思います。

種まきは、最初は「えっ？」という意表をつくことでも、長年繰り返していると定着で  
きるのかなと思います。

### インタビューを終えて

内子町では昭和57年以来30年以上  
にわたり、内子というブランド確立のため  
に、地域住民の方と協働して頑張ってい  
らっしゃるということが大変よく分かりま  
した。特に、バリアフリーやユニバーサル  
デザインということになりますと、どうし  
ても行政主導ということになりがちです  
が、住民の方も行政の施策に積極的に  
関わっていらっしゃるということは、ま  
さに「内子デザイン」と言えるのではな  
いでしょうか。



インタビュー実施日：平成29年7月19日（水）・聞き手：小野、竹内

(※) 流し雛と同じ。3月3日の節句の夕方、雛人形を川や海へ流すこと。